

『ぐんま方言かるたⅡ』の制作を通した学生の成長

—社会人基礎力の観点から—

兼本 雅章

キーワード

ぐんま方言かるたⅡ ぐんま方言かるた 社会人基礎力 学生の成長

要旨

『ぐんま方言かるたⅡ』¹⁾は、2019年度から3年間の計画で立案された『ぐんま方言かるた』²⁾の第2弾を作るプロジェクトで制作され、2021年12月から販売が開始された。前作の『ぐんま方言かるた』と同様に、共愛学園前橋国際大学の3つのゼミの学生と研究者が共同で開発・制作したものである。本論文では、『ぐんま方言かるたⅡ』制作プロジェクトの概要を述べるとともに、2021年度に3ゼミ合同で行われた『ぐんま方言かるたⅡ』の制作を通した学生たちの成長に焦点を当てる。実際に『ぐんま方言かるたⅡ』の制作に関わった3つのゼミの学生たちが、約1年に渡るこの制作を通して、どのような成長をしたのかを社会人基礎力³⁾の指標を使いながら考察していく。

1 はじめに

2012年12月に販売が開始された『ぐんま方言かるた』は、2012年度から3年計画の本学の研究者3名による共同研究プロジェクトの一環として、各研究室のゼミの学生および研究者によって制作されたものである。販売開始後、上毛新聞(2012)や共同通信社による記事の全国配信などによって、県内外からの問合せが殺到し、当初の予想を遙かに超える売れ行きとなった。初回の3000部は2ヶ月足らずで無くなり、2013年2月には3000部、同年11月にはさらに4000部を増刷するほどのヒット商品となった。

2017年末になると、『ぐんま方言かるた』の在庫が1000部を切るようになり、今後、どのようにするのかを検討する必要性が出てきた。『ぐんま方言かるた』を新たに増刷する案もあったが、そこで大きな問題になった点の1つが「ぐんまちゃん」の使用である⁴⁾。「ぐんまちゃん」の使用には、群馬県からの許諾が必要であるが、その方針が徐々に厳しくなり、既存商品に関しても、許諾番号の記載をしなければならなくなっていた。それに対応するには上蓋パッケージやCD、絵札のデザインを変更せざるをえず、そのコストを考えると増刷よりも新規で第2弾を作った方がいいのではないかと、ということになる。そこで、『ぐんま方言かるた』の販売10周年を記念して、2022年度に第2弾を制作するという計画を立て

た。しかしながら、2018 年末には『ぐんま方言かるた』の在庫が 500 部を切ってしまったため、この計画を 1 年前倒して、2021 年度に制作することになった。また、『ぐんま方言かるた』の第 2 弾が制作されることを事前に知ってもらうため、制作前に 2 度、読み札と絵札を一般公募するコンクールを開催することにした。

本論文では、『ぐんま方言かるた』とほぼ同様の枠組みで行われた『ぐんま方言かるたⅡ』制作プロジェクトの経過を述べるとともに、特に、『ぐんま方言かるたⅡ』（写真 1）を制作した 2021 年度の 3 つのゼミの学生たちの成長に焦点を当てて分析をする。

写真 1 ぐんま方言かるたⅡ



(出所)『ぐんま方言かるたⅡ』制作プロジェクト資料より

2 『ぐんま方言かるたⅡ』制作プロジェクト

『ぐんま方言かるたⅡ』制作プロジェクトは、2012 年の『ぐんま方言かるた』制作プロジェクトの枠組みを基に、2019 年度からの 3 年の計画で立案されたプロジェクトである。前回同様、方言研究・国語教育の佐藤高司ゼミ（以下、佐藤ゼミとする）、芸術・美術教育の本多正直ゼミ（以下、本多ゼミとする）、公共経済学・起業家教育の兼本雅章ゼミの仮想企業「満美蚕」⁵⁾の 3 つのゼミの学生たちが協同して行っていくことになった。前回と大きく異なる点は、『ぐんま方言かるた』制作プロジェクトは、1 年目に商品を作り、2 年目以降はその普及を図るための活動を行っていったのに対し、『ぐんま方言かるたⅡ』制作プロジェクトは、最初の 2 年は『ぐんま方言かるたⅡ』を制作するための準備期間という位置づけで、3 年目に商品を制作することになっていたことである。

(1) みんなで作ろう「ぐんま方言かるたパートⅡ」コンクール

2019 年と 2020 年に行われた『みんなで作ろう「ぐんま方言かるたパートⅡ」コンクール』は、佐藤ゼミ主導で行われた。2019 年は特に他の 2 ゼミが関わることなく行われ、応募数が 27 名の 144 作品となった。コンクールを初めて開催したということもあるかもしれない

が、やや低調な応募数であった。これを受けた翌 2020 年、『ぐんま方言かるた』の在庫数がとうとう 2 桁となり、次作の『ぐんま方言かるた』の第 2 弾が売れないと困ると考えた繭美蚕は、コンクールが新商品を知ってもらえる良い機会と認識し、積極的にコンクールの告知に関わろうとした。しかしながら、コンクールを実施することに重きを置いていた佐藤ゼミには、この行動をなかなか理解してもらえなかった。プロジェクトとして、あまり順調に募集の告知が行われたとは言い難い状況ではあったが、前回の 2019 年に比べ、応募者は 199 名（団体含む）と約 8 倍、応募作品は 596 作品で 4 倍以上となり、想像以上に盛り上がったコンクールとなった。

（２）『ぐんま方言かるたⅡ』の制作過程

2021 年度に入ると、『ぐんま方言かるたⅡ』の制作に向けて、本格的に始動することとなる。4 月には、3 つのゼミが集まり、初めての合同会議が開催された⁶⁾。ここで各ゼミの役割分担が示され、全体の統括に関しては、前作でその役割を担っていた繭美蚕から佐藤ゼミに変更することが提案された。前作のとき、佐藤ゼミは読み札を選定した後にやる事が無くなってしまったことが問題となっており、それを考慮した形である。その結果、読み札制作・全体統括が佐藤ゼミ、絵札・パッケージ制作が本多ゼミ、広報・販売が繭美蚕という役割分担となった。また、前作を経験した教員からのアドバイスを入れ、各ゼミが現実的な役割分担になるようにも修正された。さらに、前作に比べ、3 ゼミで会議をする予定がほとんどないことにも疑義が出され、ゼミ長・ゼミ教員会議⁷⁾を随時設けることで合意をした（図表 1）。

図表 1 役割分担とスケジュール

作業内容	ゼミ	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
3ゼミ合同会議		第1回			第2回		第3回		第4回		
ゼミ長・ゼミ教員会議					第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	
読み札考案	佐藤	←	→								
業者選定	佐藤		←	→							
読み札一覧制作（方言・共通語）	佐藤			←	→						
読み札CD制作・FMぐんま交渉	佐藤		←	→							
業者交渉	佐藤		←	→							
記者会見準備	佐藤								←	→	
絵札づくり	本多	←	→								
ぐんまちゃん札制作	兼本・本多		←	→							
パッケージ・CDデザイン	兼本・本多				←	→					
ぐんまちゃん使用許可	兼本・本多			←	→						
販売計画・開拓	兼本				←	→					
バーコード取得	兼本					←	→				
教育実習			←	→				←	→		

完成・記者会見・販売開始

（出所）『ぐんま方言かるたⅡ』制作プロジェクト資料より

これを受け、佐藤ゼミが 4 月に読み札の選定を始める。しかしながら、新型コロナウイルスの第 4 波の影響で、5 月中旬には群馬県内にまん延防止等重点措置が適用され、学生た

ちは1ヶ月ほど登校できなくなりました。そのため、対面で作業をすることは難しくなったが、与えられたスケジュールのもと、各ゼミでそれぞれの活動をしていくことになる。佐藤ゼミによって選定された読み札の候補は本多ゼミに順次送られ、6月には絵札の制作が開始されるようになった。当初の予定よりもやや遅れたスケジュールになってはいたが、概ね順調に進んでいった。しかし、本多ゼミによる絵札の制作が進んでいくと、過去2回行ったコンクールの作品の内容を上手く反映していないのではないか、という指摘が出てきた。その点を確認してみると、コンクール作品の反映のさせ方に関する認識が、読み札を選定する佐藤ゼミと本多ゼミや繭美蚕との間で異なっていることがわかった。そこで、教員間で摺り合わせをし、コンクールの作品をより反映するように改め、これまでに決まっていた読み札や絵札も一部修正することになった。その後、佐藤ゼミによる読み札の選定が無事に終了する。今度は、本多ゼミから佐藤ゼミや繭美蚕に、上蓋パッケージや絵札のデザインに関する意見を求められるようになった。上蓋パッケージのデザインに関しては、商品名の文字バランスがあまり良くなかったことから、繭美蚕が商品名を『ぐんま方言かるた part II』から『ぐんま方言かるた II』に変更することを提案し、了承された。これに伴い、全体的にバランスの取れたデザインにするため、背景にある群馬県の地図の配置も変えることになった。また、絵札に関しても、構図がおかしいことを指摘し、デザインを修正したものがある。

8月に入ると、新型コロナウイルスの第5波により、まん延防止等重点措置、緊急事態宣言が立て続けに群馬県に適用される。学生たちは再び、大学への登校ができなくなるが、オンラインを使いながら活動を継続していくことになる。8月末に行われたエフエム群馬での音源収録は、大森昭生学長から特別に許可を得て、何とか行うことができた。9月には、群馬県との間で調整を続けていた「ぐんまちゃん」の利用に関しての許可も得られ、上蓋パッケージや絵札も完成した。10月になり、通常登校に戻ると、3ゼミ合同会議が復活し、月ごとに会議を重ねていくことになる。これを受け、繭美蚕は販路の開拓を進めていき、11月には県内の書店や旅館、観光施設などへの営業を行っていった。12月8日に大学で行うことに決定した記者会見の準備に学生たちが追われる中、完成商品が無事に業者から納入され、すでに決まっていた取引先への納品が繭美蚕によってすぐに行われた。販売日は六曜を考慮し、記者会見の2日後の12月10日に決定した。

記者会見には、NHK 前橋・群馬テレビ・エフエム群馬・上毛新聞・日本経済新聞社・朝日新聞のマスコミ 6 社が参加した。大森昭生学長の挨拶のあと、各ゼミの代表者がそれぞれの担当した部分について発表をした。この記者会見の様子は、音声メディアでは即日放送され、その他のメディアも順次、紙面に掲載された。NHK 前橋からは、『ぐんま方言かるた II』の制作を始めた頃から密着取材を受けており、その様子は12月16日の「ほっとぐんま 630」にて放送された。また、『ぐんま方言かるた II』は前作同様、学校現場での活用を目指していたため、群馬県教育委員会を通して、県内のすべての小学校に1部ずつ寄贈された⁸⁾。この贈呈式の様子は、上毛新聞と読売新聞で取り上げられた。これらのマスメディ

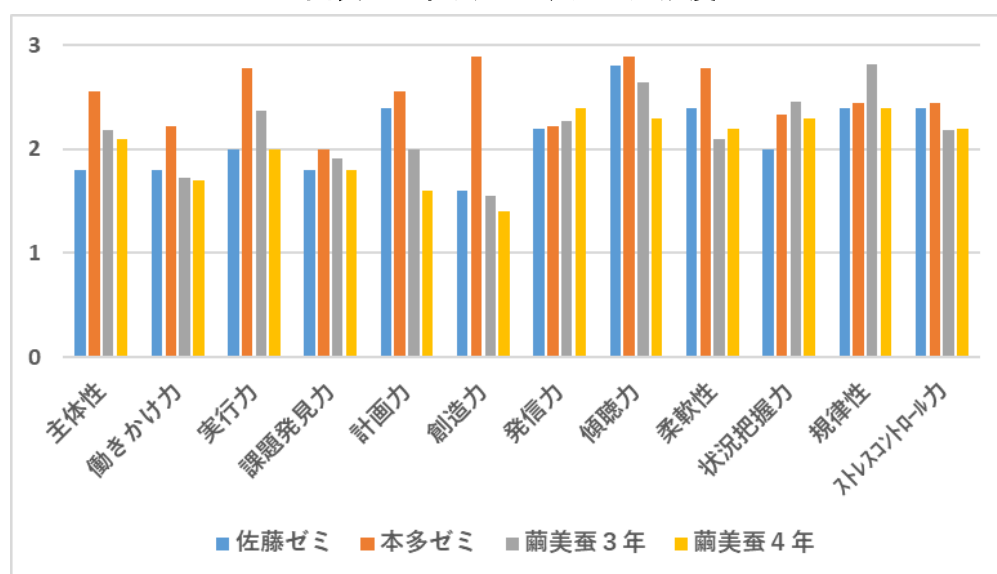
アの影響もあり、12月末には取扱店舗が72箇所となり、納品数も1151部までに達した。

翌年1月には、最後の3ゼミ合同会議が開催された。無事に『ぐんま方言かるたⅡ』を完成させるという目標は達成されたため、今後の方針が検討される。繭美蚕による商品の販売が今後も続くことを受け、佐藤ゼミを中心に今後もそのサポートをしていくことになった。しかしながら、新型コロナウイルスの第6波の影響で1月下旬には、3度目のまん延防止等重点措置が群馬県に適用され、実質上、3ゼミが合同で何かをするという機会は失われてしまった。よって、それが解除される3月下旬まで、販売のために必要な最低限の活動を繭美蚕が行うだけになってしまった。

3 社会人基礎力でみる学生たちの成長

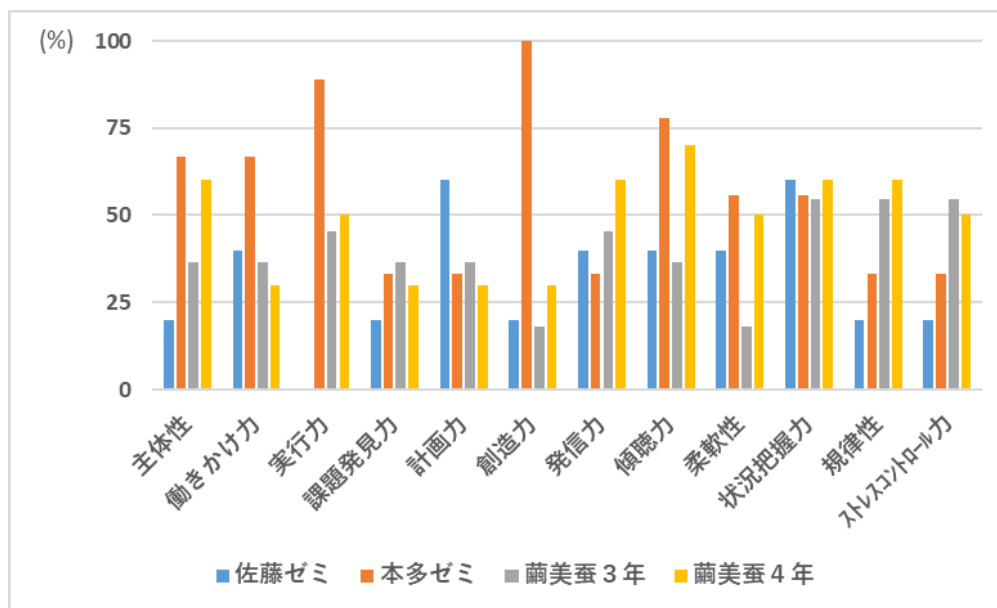
『ぐんま方言かるたⅡ』の制作に関わった学生たちがこのプロジェクトを通して、どのような成長を遂げたのかを把握するため、社会人基礎力を基にしたアンケートを取ることにした。アンケートの内容は、社会人基礎力レベル評価基準表のモデル（経済産業省編（2008））をベースに達成度を3段階で評価するものと、プロジェクト開始前と比べて、自分の能力が上がったと思われる能力要素を答えるものである⁹⁾。また、3つのゼミが同じような理解でアンケートに回答できるように、筆者がアンケートの内容を説明する動画を作成し、佐藤ゼミと本多ゼミにはそれを見てから答えてもらうように工夫した。実施時期に関しては、卒業してしまう繭美蚕の4年生には2022年3月に、本多ゼミと繭美蚕の3年生は4月、佐藤ゼミは5月に行った。回答数としては、佐藤ゼミが5名、本多ゼミが9名、繭美蚕の3年生が11名、4年生が10名である。

図表2 社会人基礎力の達成度



（出所）アンケートをもとに筆者作成

図表 3 社会人基礎力の伸び



(出所) アンケートをもとに筆者作成

その結果を表したものが、図表 2 と図表 3 である。図表 2 は、学生たちが 3 段階で評価した社会人基礎力の達成度を合計し、人数で割った平均値となっている。図表 3 はこのプロジェクトを行う前と比べて伸びたという項目に○をつけてもらった合計数を、各ゼミで比較しやすくするため、人数で割り百分率で表したものである。それでは、これらをゼミ毎に検証していこう。

(1) 佐藤ゼミ

佐藤ゼミは傾聴力が 2.8 と最も高く、その後に計画力・柔軟性・規律性・ストレスコントロール力が 2.4 と続いている。学生たちの記述から、傾聴力に関しては 3 ゼミ合同会議の内容が多く、全体を統括する立場であったという意識がうかがえる。また、計画力に関しては、読み札選定の際の記述が多く、「読む札を制作する期間にズレが生じた際、制作のスピードを上げて計画を調整しつつ、計画と合うように取り組んだ」「自分の仕事の締切を見越して事前に計画を立てて実行した」など、状況に応じてうまく計画を変更しながら行っていた様子が表されている。このことは、学生自身が伸びた能力として計画力を選んだ学生が半数以上いることからわかる。一方で、「前に踏み出す力 (アクション)」の項目が全体的に低く、実行力が誰も伸びていないというのは、ちょっと驚きの結果であった。3 つのゼミを統括するというリーダーとしての役割から考えれば、これらの項目はあまり低くならないはずである。このことから、3 つのゼミを統括するという役割がゼミ全体としては、十分に果たせていなかった可能性が考えられる。これは、これらの項目に対して、学生たちが 3 ゼミのことを意識した記述がほとんどないことや、前作を統括した繭美蚕のデータ

と比べても低いことから推察される。

（２）本多ゼミ

３ゼミの中で、特筆するほどの数値を示したのが、本多ゼミである。12すべての項目で2以上であり、創造力と傾聴力は2.89、実行力と柔軟性は2.78、主体性と計画力は2.56と高ポイントになっている。また、プロジェクト前と比較して伸びたと思う能力要素も、7項目が半数を超えており、その中でも創造力は9名全員、実行力は8名、傾聴力は7名となっている。この結果に関しては、絵札の制作によるところが大きいことが学生たちの記述からも明らかであるが、学生たちがこのプロジェクトをストレスなく進められるように全体をデザインした本多正直教授の指導力も大きい。本多正直教授によれば、初めての試みであった前作の『ぐんま方言かるた』の制作時は、試行錯誤の連続であったという。実際にうまくいかないことが多く、その元凶となっていたのがスケジュール感と各自の役割分担であった¹⁰⁾。そこで、前作で培ったノウハウとそのときの反省をもとに、スケジュールを見直すとともに、学生たちの適正も考えながら役割分担をしたという。その上で、ゼミの学生たちが「全員で絵札を完成させる」という共通の目標に向かって制作を行えたことが高評価に繋がったようである。本多正直教授は、「核となる学生が前作は1名だったが今回は2名いたことと、制作に携わる学生も前作の6名から9名と増えたことで、個人の負担が軽減されたこと。そして、絵札の制作を個人ですべて行っていくというよりも、皆でデザインの議論をすることでサポートをしあう雰囲気を作れたことが大きい」と語っている。

（３）繭美蚕

繭美蚕については、例年秋に代替わりとなるため、プロジェクト当初は4年生を中心に進め、徐々に実際に販売を担っていく3年生が中心になるように活動をしていった。そのため、繭美蚕内でも評価の傾向が少し異なっており、実働部分を多く担った3年生の方がほとんどの項目でやや高い結果となっている。

3年生は、規律性の2.82が最も高く、その後に傾聴力の2.64、状況把握力の2.45と続いている。規律性に関する学生たちの記述を見ると、「期日までに納品したり、精算をしたりすることで企業様の信頼を損ねることがないようにした」「営業や納品の際の約束・マナーに気をつけた」「金銭のやりとりが発生することを自覚し、企業に対しては、特に誠実さやスピード感のある対応を心掛けた」など、営業や納品、精算など、実際の企業と関わったことによるものが多い。また、傾聴力や状況把握力に関しては、これに加えて3ゼミでの合同会議や繭美蚕内の会議における記述も多くみられた。

4年生は、発信力と規律性が2.4で最も高く、傾聴力と状況把握力が2.3、柔軟性とストレスコントロール力が2.2と「チームで働く力（チームワーク）」のすべての項目が上位を占めている。そして、これらの項目すべてで、プロジェクト前と比較して伸びたと思っている学生が半数以上いる。これは、4年生が繭美蚕の活動が始まってから、ずっとコロナ禍

であったことの影響が図らずともあるであろう。コロナ禍でも自分たちでできることは積極的に行ってはいいたが、コロナ禍前とはやはり違い、できないことの方が圧倒的に多かった印象は否めない。その中において、この『ぐんま方言かるたⅡ』制作プロジェクトは、チームとして働くという点で本当に貴重な体験ができたものと判断することができる。その一方で、「考え抜く力（シンキング）」の3つの能力要素は伸びも含めて低調であり、これは3年生も同じ傾向であった。

4 むすびにかえて

『ぐんま方言かるたⅡ』の制作は、コロナ禍で様々な行動に制限がかけられる中、無事に商品を完成させ、販売を開始することができた。その後の販売もまずまず順調で、2022年4月頃には初版の在庫が少なくなり、同年8月には5000部を増刷している。

2021年度の『ぐんま方言かるたⅡ』制作プロジェクトを振り返ってみると、『ぐんま方言かるた』を制作したときの経験が随所に活かされ、それが学生たちにとってより良い成長に繋がっていたことがわかる。以下では、その観点からの事例をいくつか紹介していく。まずは、スケジュールについてである。今回は、前作のスケジュールを参考に、とりあえずはその通りに実行すれば商品ができる、という目途が立っていたことが大きい。よって、制作中に2度に渡って学生たちが大学に登校できない事態となっても、様々なツールを駆使しながら、作業を進めて行くことができた。それに加えて、特に読み札や絵札を制作したゼミにとっては、自分たちの計画の見直しもしやすかったと思われ、それが計画力の高評価に表れていると考えられる。次に、会議の持ち方についても変更された。前作は3ゼミ合同会議を学生主導で学生たちの空き時間を使って行っていたが、それを今回は、佐藤ゼミと本多ゼミの課題演習の時間を使って行うようにし、教員と学生がほぼ全員、参加できるようにした。また、3ゼミ合同会議とは別に、ゼミの代表者と教員による連絡会議も定期的に行われたようになった。このことは「チームで働く力（チームワーク）」に少なからず影響があったと考えられ、それは前作と比べると6項目ともすべて評価が高くなっていることから推察できる。最後に、取り組み方の変更である。第3章2節で紹介した本多ゼミの絵札の制作の仕方がまさにそれにあたり、それによる学生たちの成長は目を見張るものがあつた。また、繭美蚕では、販売開始時点での販路の確保は必須の事項であつた。前作では、販売開始時に一般店舗の販売場所をほとんど確保できなかったため、見切り発車のような形で始めざるを得なかったからである。そこで、今回は『ぐんま方言かるた』の販売先をうまく活用しながら、学生たちによる創意工夫によって、記者会見時には、県内の書店をはじめ温泉地の旅館や土産店などを含む64箇所での取り扱いが決まり、納品することもできていた。これは、第3章3節で紹介した繭美蚕の3年生の成長に大きく反映されている。一方で、プロジェクト全体を統括する役割を繭美蚕から佐藤ゼミに変更したことによる影響も少なからずあつたと考えられる。前作のとき、佐藤ゼミは読み札を選定し終わると、プロジェクト内でやることがないという意識が出てしまった。そのため、今

回は佐藤ゼミが全体の統括に回ることによって、プロジェクト内での役割を最後まで持つことには成功した。しかしながら、商品を売った経験がない佐藤ゼミが、商品開発の本来のゴールである「商品が売れ続けるためにどうするか」という観点から、プロジェクトの統括として陣頭指揮を執ることまではできなかった¹¹⁾。常に自分たちの開発商品の販売を手掛けている繭美蚕とは違い、広報や販売の戦略を考えるようなことはしたことがなかったからである。佐藤ゼミがその重要性を理解し、プロジェクト内に「商品をいかにして売るか」という概念を浸透させるような行動ができるよう、教員側がもっと指導することができていれば、さらに学生たちを成長させることができたのではないかと考えている。

注

- 1) 当初、『ぐんま方言かるた』の第2弾の名称は『ぐんま方言かるたパートⅡ』としており、制作前の2回のコンクールもこの名称を使用した。その後、実際に商品作りを進めて行く中で、上蓋パッケージのデザインの問題などがあり、第2章2節で書いているように、『ぐんま方言かるたⅡ』の名称に変更された。そのため、本論文内ではコンクールのタイトルを除き、『ぐんま方言かるたⅡ』で統一している。
- 2) 『ぐんま方言かるた』の内容に関しては、佐藤（2013）、佐藤・本多（2017）を、その制作を通じた教育効果については、兼本（2014）を参照されたい。
- 3) 社会人基礎力とは、2006年2月に経済産業省が産学の有識者による委員会において『職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力』として定義したもので、「前に踏み出す力（アクション）」「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」の3つの能力から構成されている。この3つの能力はさらに細かく12の能力要素に分かれており、「前に踏み出す力（アクション）」は主体性・働きかけ力・実行力、「考え抜く力（シンキング）」は課題発見力・計画力・創造力、「チームで働く力（チームワーク）」は発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力となっている。
- 4) これ以外の点としては、前作の『ぐんま方言かるた』によって、群馬方言及びその保存・継承に対する考え方の認知は高まったが、さらなる活発化を目指して第2弾を制作することにした（佐藤（2023）p.3）、としている。
- 5) 繭美蚕の活動や商品開発の内容については、兼本（2011）、（2014）、（2015）、（2017）、（2018）に詳しい。
- 6) 佐藤ゼミと本多ゼミは3年生が、繭美蚕は3、4年生の2学年が参加した。繭美蚕は、前作で主に関わっていたのはメンバーの一部であったが、今回は全員となっている。
- 7) 実際には、ゼミ長・ゼミ担当者会議と呼ばれていた。繭美蚕は3・4年生合同で参加していたこともあり、この会議にはゼミ長ではない3年生が担当者として参加していた。
- 8) 前作の『ぐんま方言かるた』の際は、前橋市と伊勢崎市の小学校のみの寄贈であった。
- 9) 『ぐんま方言かるた』を制作したときと比較することを考え、そのときに行ったアン

ケートと同じものを使用することにした。

- 10) これは、前作のときの評価で計画力が 1.33 を示していることから推測される。
- 11) 実は、佐藤ゼミがそのような事態になることを想定して、読み札の選定が終わった 7 月に筆者が商品開発に関する考え方の講義を行ったが、やはりそれだけで実行するのは難しかったようである。

文献

- 兼本雅章（2011）「「繭美蚕（まゆみさん）」による産学連携の取組み」『共愛学園前橋国際大学論集』第 11 号、pp.15-30。
- 兼本雅章（2014）「異分野の学生たちによる『ぐんま方言かるた』制作プロジェクトとその教育効果－仮想企業「繭美蚕」の活動を中心に－」『経済教育』第 33 号、pp.166-175。
- 兼本雅章（2015）「産学連携の商品開発に関する一考察」『共愛学園前橋国際大学論集』第 15 号、pp.29-44。
- 兼本雅章（2017）「産学官連携－商品開発を通じた地域活性化－」、奥野信宏・八木匡・小川光編著『公共経済学で日本を考える』中央経済社 所収。
- 兼本雅章（2018）「オール前橋魅力発見プロジェクトと地域経済－産学連携商品『美香蔵』を通して－」『共愛学園前橋国際大学論集』第 18 号、pp.221-229。
- 経済産業省編（2008）『今日から始める社会人基礎力の育成と評価～将来のニッポンを支える若者があふれ出す！～』角川学芸出版。
- 佐藤高司（2013）「「ぐんま方言かるた」読み句の制作過程とその特徴」『共愛学園前橋国際大学論集』第 13 号、2013 年、pp.73-85。
- 佐藤高司・本多正直（2017）『群馬県民の知らない上州弁の世界「ぐんま方言かるた」の秘密』上毛新聞社。
- 佐藤高司（2023）「「ぐんま方言かるたⅡ」制作の過程と課題」『共愛学園前橋国際大学論集』第 23 号、pp.1-12。

資料

- 上毛新聞（2012）「群馬弁かるた 前橋国際大生が商品化」『上毛新聞』2012 年 12 月 23 日朝刊、p.19。

Abstract

Growth of students through the production of “Gunma Dialect Karuta II”: A Perspective on Fundamental Business Skills

KANEMOTO Masaaki

"Gunma Dialect Karuta II" emerged as part of a three-year project that began in 2019 to create a second edition of "Gunma Dialect Karuta," with sales kicking off in December 2021. Like its earlier version, this project was a collaborative undertaking between students and professors from three seminars at Kyoai Gakuen University. This paper describes the creation of "Gunma Dialect Karuta II," focusing on the growth of students engaged in its joint production across the three seminars in 2021. Using the index of fundamental business skills, the paper evaluates the growth of students, particularly those actively involved in the project.